

## 2010 年の日本各地域でのクマの動向について（暫定版）

作成：日本クマネットワーク

無断転用を禁じます

各地域での状況について、以下の 3 項目について 2010 年 10 月末日時点での情報を集約した。ただし各地区のすべての情報を網羅しているわけではない。

- a) クマの出没に例年と異なる傾向があるか
- b) ある場合はその原因の推定と根拠
- c) 捕獲数や人身事故の傾向

なお、各地域での状況は以下のように要約できた。

1. ツキノワグマの出没は全国的にみれば例年以上であり、被害防止のための捕獲が顕著に増加している。ヒグマについては、例年なみである。  
（参考）環境省による 10 月末の暫定的な報告によれば、ツキノワグマによる人身被害者数は 118 人、被害防止のために捕獲された個体数は 2590 頭と例年の 2～3 倍にのぼっている。一方、ヒグマについては、人身被害者数は 2 人、捕獲数は 430 頭と例年並みである。
2. ツキノワグマの出没の状況は地域によって異なる。詳細は、下記の地域毎の概況を参照されたい。
3. 出没の季節の変化については、顕著に多くなったのは、晩夏から秋にかけてである。ただし今年の特徴として、出没が初夏から例年以上に多くなる傾向があり、人身被害も同様に発生したということがある。
4. ドングリ類の結実状況については、JBN の地区委員からの報告によれば、出没の多い地域ではブナ科堅果の作柄が概ね悪い。この結果は、環境省が各都府県に照会した結果と一致している。ツキノワグマにとってブナ科堅果は秋の重要な食物であり、この作柄が今年の秋以降の出没に大きな影響を与えた可能性はかなり高い。しかし、地区委員の報告では、夏期からのその他のクマの食物の利用可能量や、メスグマの繁殖状況の年変化が出没に影響を与えた可能性も指摘された。

\*\*\*\*\*

### 【北海道地区】

- a) 北海道の鳥獣統計によれば、狩猟と許可による捕獲を合計した年間捕獲数の 2005～2009 年における平均値は 502 頭である。一方、本年については 10 月 20 日時点での暫定集計値は 417 頭であり、過去 5 年間と比較して特に多いわけではない。北海道では、ヒグマの出没に伴う軋轢対策として捕獲が実施されていることから、現時点では本年の状況に例年と著しく異なる特徴があるとはいえない。

- b) 北海道では、8-9月の捕獲数の増加傾向が著しく、この時期に農業被害が多発することから、要因として農作物を食物として学習した個体の増加が挙げられる。一方、堅果に依存する10月以降（10～12月）の捕獲数は、年次変動はあるものの、顕著な増減傾向はない。堅果の豊凶がこの時期の捕獲数に影響すると考えられる。北海道が実施している堅果の豊凶調査によれば、本年は並作以上とされる。ヒグマが堅果を利用ようになる10月以降の捕獲は減少傾向にある。北海道が実施している堅果の豊凶調査と出沒予測については、以下のHP参照
- [http://www.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/B794F50A-00FD-4A3D-85AE-7F16712491EC/0/H22Fall\\_Bear\\_forecast2.pdf](http://www.pref.hokkaido.lg.jp/NR/rdonlyres/B794F50A-00FD-4A3D-85AE-7F16712491EC/0/H22Fall_Bear_forecast2.pdf)
- c) 捕獲数については上述のとおり。人身被害については、2005～2009年までの5年間に15名が死傷（死亡：6名、負傷9名）していることから、年間平均3名の頻度で発生している。15名のうち狩猟者が7名（死亡2名、負傷5名）を占め、ヒグマ駆除中あるいは狩猟中の被害がほぼ半数を占めるという特徴がある。本年は5月にむかわ町穂別で、6月に帯広市で一件ずつ人身被害が発生し、2名が死亡しており、それぞれ山菜採り中の被害であった。帯広市の事例では平野部の防風林中に侵入した個体との遭遇によるものであった。被害発生の要因では、被害者の半数を狩猟者が占めることから、手負い個体による狩猟反撃やデントコーン畑中での接近遭遇によるものが半数を占める。また、狩猟者以外の事例では、ヒグマと至近距離で突然の遭遇をした結果、被害につながったものが多くを占めていると考えられる。

#### 【東北地区】

- a) 各地域とも夏までの人里、市街地への出沒は例年以上に多く見られた。山形県の学校侵入の例を始め、盛岡市でも動物園に侵入、市街地の北上川の河原に出沒（前者は放獣、後者は捕殺）するなど、これまでにあまり例のない出沒が見られた。普段は余り好んで食べないクルミを食べた真っ黒なフンを今年は良く見かけ、河川敷に多いクルミを探しながら次第に下がって来る可能性もある（山形）。岩手県では北奥羽個体群が捕獲上限数を越えたため狩猟自粛要請が出されたが、北上高地個体群ではまだ上限数までに余裕があるので、狩猟は実施される見込み。なお岩手県では、9月中旬以降の出沒はおさまって来ている。全体的な印象としては、人里（市街地）出沒などのトピック的な例は目立つものの、2006年のような異常出沒とまでは言えず、また行政側も冷静に対応しているように見える。
- b) 夏までの人里への出沒の原因については不明。盛岡市の例を見ると、北上川河川敷出沒個体は、北上川にそそぐ支流を下って本流に迷い出てしまった印象が強く、体調（脂肪蓄積）には問題なく、胃内容物も野生の草本および漿果種子がほとんどで、わずかに米ぬか（田畑によく積んである）が含まれていた程度。エサ不足で街まで出てきた印象はあまりない。動物園侵入個体は、園内にクワの林があり（マダワ）、大量の結実が見ら

れたこと、動物園自体がクマの生息域の森林帯の端に位置することなどから、通常年でも十分有り得たことと考えられる（今年以外でもかつて園内でフンが発見された事実が今回明らかになった）。

秋の堅果類の結実はこの地域も不作～凶作。ブナはほとんどの県で凶作か。ただし岩手県（盛岡近郊）は、ブナは凶作だが、クリ、コナラはある程度結実しており、秋以降の出没の減少はこのことと関係が有るかもしれない（山に帰った可能性がある）。

山形では「ナラ枯れ」に加えて「ブナ枯れ（ウエツキブナハムシによるもの）」も見られており、今年はブナもドングリも少ない。また春先の低温、夏の猛暑が植物に与えた影響も考えられる。

- c) 9月までの捕獲数が例年を大幅に上回る県がほとんど（山形、福島、宮城、秋田）。だが捕獲上限数に届いていない県もある（山形、岩手など）。ただし山形では秋遅くになってもまだ人里周辺でクマの動きが見られ、今後も人身事故が続いた場合は、捕獲上限数の見直しも考えられる。

人身事故は例年よりは多い傾向（特に夏まで）。しかし2006年のような異常事態ではない。秋になって全体的に落ち着いてきている（除く山形）。

上述のように捕獲数はほとんどの県で、昨年の最終実績よりすでに上回っているが、2006年に比べれば半数以下あるいは若干多い程度で済みそうである。

#### 【関東地区】

- a) 出没が増加しているのは東京都、群馬県、栃木県、神奈川県、平年並みとしたのは埼玉県であった。増加した都県では、通常8月に多い有害捕獲の数が9月や10月にずれこむなどの傾向がある。

東京：人家周辺での出没・目撃数が増加し、養魚場の魚、カキなどにクマが付いているほか、通学路やワサビ田での目撃もある。

栃木：例年捕獲のピークは8月であるが、今年は9月の方が多かった。2006年も9月や10月に多い傾向であった。

群馬：H18に比較するとやや落ち着いた状況であるが、異常といえる。例年に比べて、目撃情報が増加している（H20：121件、H21：122件、H22：452件、9月末時点）。

神奈川：8月下旬以降、丹沢山麓全域で過去例にない出没が続いている。カキ、クリなど果樹被害の確認事例が以前から急増した。

- b) 全域的に、堅果類（ブナ、ミズナラ）の不作が指摘されている。なお、今年に限ったことではないが、神奈川ではその他に「山麓の食物資源の増加・里山の荒廃」も原因として指摘している。

東京：ブナ、イヌブナ、ミズナラ、コナラ、クリ、オニグルミすべてについて2009年よりも不作である。ただし、ミズナラとクリについては、一部地域で結実している。

栃木：県内の調査により、堅果類（ミズナラ、ブナ）の不作が明らかである。群馬：堅

果類のできが悪いこと。ブナ(0.3%：県で調査指標としている豊凶指数)、ミズナラ(15.9%), コナラ(33.5%), クリ (35.7%)。

神奈川：丹沢全般的に秋の実のなりが良くない(種と個体差あり)。(丹沢クマ調査者の概況報告)。ブナはおそらく凶作(西丹沢)。コナラは全体的には凶作(山麓でなりのよい個体もある)。ミズキ・オニグルミは2009年より不作(個体差あり)。ウワミズザクラは豊作。アラカシは並作(?)。山麓の食物資源の増加や里山の荒廃により、出没のある地域周辺は、手入れ不足の雑木林が広がり、クマが身を隠しながら、食料を得ることができる餌条件の良い環境となっている。

埼玉：堅果類は凶作あるいは並作

- c) 捕獲数は生息数の多い北関東で多く、南関東では例年並み。人身事故は群馬では多いが他は例年並み。群馬ではこれまでは目撃数が少なかった行楽地(赤城山)で目撃数が多くなり、人身事故が起きている。

東京：これまでに2頭を罠により有害捕獲している。ちなみに2006年は0頭であった。

栃木：10月末までに53頭捕獲されており、すでに2006年に次ぐ値となっている。人身事故は2件であり、例年並み。

群馬：今年的人身事故の特徴とすると、親子グマが関与したものが多い傾向がある。子供が登山者の足に絡みつくなど、5件が親子グマによる事故であった。また、従前目撃が少なかった赤城山においてもクマの目撃が多く、人身事故が1件発生している(赤城山はミズナラなどが豊作であった)。H18：7件、H19：4件、H20：1件、H21：2件、H22：9件(平成22年11月11日現在)

神奈川：例年並み。非公式に伝えられている事例が数件あるが、新聞で報道されるような大きな事例はない。

## 【北陸地区】

(石川県)

- a) 今年の出没目撃状況は、北陸から西日本の中心に大量出没が見られた2004年(合計1000件以上)ほどではない。また、2006年と比べると、11月1日現在、出没目撃数は310件(H18同期295件)、痕跡数は、104件(H18同期180件)とほぼ同程度になっている。9月の出没目撃件数48件は2006年の82件を下回っていたが、10月には161件と2006年の161件を上回っています。

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/kuma/h22mokugekikennsuu.html>

また、地域別に見ると加賀市、金沢市、かほく市などで2006年を上回る出没目撃件数となっている。今年のエサ資源調査の結果は、以下の通りである。

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/kuma/h22esakekka.html>

ブナ大凶作、ミズナラ並作、コナラ並作は2006年と相似しており、標高の高いところに餌が少なく、標高の低い地域に餌が多いとみている。目撃情報の増加状況から、9月

28日にクマ出没注意情報を発表した。10月3日に金沢市中心部に近い公園で9:00にジョギング中の男性が親子クマに襲われる事故があり、10月5日に出没警戒情報を発令した。

- b) 金沢市周辺で9月に出没して人身事故と起こしたものや、捕獲された個体の傾向は、母子群や今年親離れしたばかりの子グマが多い印象である。金沢市は人口45万の北陸代々の都市であるが、住宅街が山裾まで広がり、里山地域（クマの生息地）と隣接した状態になっている。出没地点も金沢市の南東部を取り巻くように分布している。

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/sizen/kuma/documents/1001-1010map.pdf>

そのため、2004年、2006年に出没した個体の里山地域での定着(繁殖も含む)が進んでいたのではないかと推定している。

- c) 10月末までの捕獲数は51頭で、2006年の56頭ほどにはなっていない。11月に入り、出没件数は少なくなりつつあるように見えるが、これまでの経験から11月末までは出没は続くとみている。人身事故は7月1件、9月1件、10月1件の合計3件で、いずれも金沢市である。7月を除く2件は子連れの母グマによるものであった。狩猟自粛に関する、新潟、富山両県の通知については、新潟県では、10月28日付で今年度におけるツキノワグマの狩猟自粛を通知した。平成22年9月末現在で146頭と既に昨年の年間有害捕獲数を大幅に上回っているため、新潟県に登録する狩猟者に対し、ツキノワグマの狩猟自粛をお願いする通知を出した。富山県でも、10月28日付で今年度におけるツキノワグマの狩猟自粛を通知した。平成22年10月28日現在で106頭(うち放獣5頭)となり、「富山県ツキノワグマ保護管理計画」に基づき設定されている捕獲上限数の88頭を越えているため、富山県に狩猟登録する狩猟者に対し、ツキノワグマの狩猟自粛をお願いする通知を出した。

## 【中部地区】

### (長野県)

- a) 例年よりも明らかに出没件数が多く、人身被害と捕獲数が増えている。2006年の全県的な大量出没ほどではないが、地域的にはみれば2006年に匹敵する出没状況である。
- b) やはり夏から秋にかけて長期の餌不足が考えられる。夏の餌不足が何かはわからないが、今年はクロスズメバチが少ないとの新聞記事が出ている（長野県ではクロスズメバチ取りの文化があるので、このようなことが新聞記事になる。2006年も同様であった）。堅果類については簡単な豊凶調査が行われている。地域的なばらつきが大きい、凶作の地域が例年よりは多いようである。
- c) 捕獲数は9月末で261頭と発表されており、21年度上限数の151頭をすでに大幅に越えている。10月になっても地域的には捕獲が止まらず、現在も続いている。堅果類の豊凶の地域差が出ているのかもしれない。人身事故も例年は8人前後だが、今年は現在のところ13人である。ただし、5～8月までが12人で特に8月が多いようである。

9月の1名は捕獲中のハンターの事故である。なお、地域的に大量のクマのサンプルが届いているが、ある地域では大物ばかりが人里周辺で捕獲され、若い個体がまったく捕獲されなくなっている。今年の年齢構成はこれまでにない結果が出るかもしれない。

(軽井沢町)

- a) 住民からの通報は昨年より多いが、2006年等と比較すれば格段に少なく、例年並みである（各年度の被害／目撃件数：2006年261／124，2007年100／65，2008年88／40，2009年25／41件，2010年48／60）。軽井沢町の場合はクマに対する追い払い等の体制が年度によって違うので、件数は自然界の食物の状況を直接反映していないかもしれない。ただ、2010年秋の堅果類は並作であり、秋に入ってからクマの行動は落ち着いている。
- b) 捕獲効率は例年並み。鳥獣保護区内で捕獲されるクマの年齢構成は多様である。人身事故は1件発生しているが、クリ林でぼったり遭遇したというもので、特異な例ではなかった。クマによる人身事故は2007，2008年に1件ずつ起きており、今のところ、件数でも異状はみられない。

#### 【近畿地区】

- a) 全ての自治体の出没件数の総数を整理できていないが、近畿北部地域では出没数は通常年より多く、過去の大量出没年に匹敵するか、これを上回るものとなっている。京都府の丹後地域では春季より有害捕獲申請に至るような出没事例が通常年より多く発生し、8月中旬以降には市街地への侵入を含む出没件数の増加が認められた。紀伊半島のうち、奈良県・和歌山県でも通常年より出没情報が多く報じられている。三重県の状況は当地区委員では把握していない。
- b) 京都府丹後地域では夏季において、海岸域に進出してタブノキ（常緑高木）の果実を採食する例が複数記録された。これは過去の大量出没年には認められなかった特異的な現象である。数値的な裏付けはないが、過去の大量出没年より出没数増加のタイミングが早かったのは夏季の食物の不足が主たる要因と推測される。

あくまでも主観的な印象ではあるが、滋賀県・京都府で数年間継続して行っているヘア・トラップ調査において、誘引餌として使用した蜂蜜を採食する昆虫（甲虫やスズメバチなど）は例年と比較して少ないと感じられた。秋季において山地の食物が不足することは複数の研究機関の調査により予測された。滋賀・京都・兵庫の3府県での調査ではブナ科堅果類数種等を指標とした結実状況は全般的に劣悪で、各府県ではクマの出没に対する注意喚起を行っているところである。

出没数の増加に関しては個体群動向・生息環境等に係るマクロな変化も関与していると考えられるが、本年の件数の増加の背景には山地における食物の不足が主たる要因であろうことを強く感じている。

- c) 近畿北部地域では、春から有害捕獲例が例年より多く発生し、夏季に至るまで次第に増加してきた。8月中旬より目撃数・捕獲数ともに急増し、その傾向を維持したまま現在に至っている。京都府における有害捕獲・錯誤捕獲個体の対応件数（その多くは民間業者に放獣業務を委託している）は、現時点においても2004年および2006年の年間件数の倍をこえている。兵庫県においても同様の状況と思われる。滋賀県では捕獲数だけを見ると過去の大量出沒年を越える状況にはない。しかし、市街地への侵入例が複数報告されており、これまでの大量出沒年と同様に問題が多い年であることは間違いない。近畿北部地域全般に、農作物（特に果樹）被害・市街地への侵入が通常年より顕著に増加している。人身事故も滋賀・京都・兵庫でそれぞれ複数発生しており、過去の大量出沒年の被害数を上回る勢いである。紀伊半島での捕獲数は通常年より多いが、現時点において奈良県・和歌山県を合わせても5件程度である。捕獲の形態としては、錯誤捕獲・違法捕獲が過半を占め、有害捕獲数は少ない。ただし、養蜂被害等に対する学習放獣のための檻の設置数は和歌山県では通常年よりかなり多い。

#### 【中国地区】

##### （鳥取県）

- a) 全体的な傾向としては例年とそれほど大きく異ならないが、捕獲数が多くなっている。多いのは6～7月の目撃数（捕獲数）と8月中旬～9月上旬の捕獲数。9月下旬以降は秋の大量出沒の傾向がある。10月中旬から捕獲が急増しているが、全体的に例年より痩せ気味の個体が多いほか、親子グマの捕獲割合も高い。
- b) 6～7月の目撃数増加は、繁殖に参加するメス個体が相対的に少なく、オスが活発に行動したためと推定している。その根拠として、2009年秋はブナが豊作であったこと、2010年は親子グマの目撃数が多いこと、テレメトリー調査の結果、6～7月のオスグマの移動が例年より大きい傾向で不安定であったことが挙げられる。8月中旬～9月上旬の捕獲数増加は、猛暑による夏のエサ不足によるものと推定している。根拠は、例年より農作物被害が多いことと、通常年では余り採餌が見られない植物が摂食されていたことである。夏のエサとされるハチ、アリ類も、身近な場所では少なかったことが、ただし数値的裏付けはない。なお、2004年も猛暑で、捕獲の傾向にも同様の現象が見られていた。ただし、これらの根拠は経験的なものである。2010年のブナ科堅果類結実は、2004年よりは良い。無線追跡個体では、山中に滞在している個体も少なくない。9月下旬から10月上旬の捕獲個体は太っていた。しかし、10月下旬の捕獲個体は痩せ気味の個体が多く、通常捕獲の少ないメスや、親子の捕獲も多い。エサ不足は深刻な可能性がある。夏からのエサ不足の蓄積、積み重ねがあるのかもしれない。絶滅危惧個体群として保護の結果、個体数が増加している影響も考えられる。個体の増加率は従来言われているより高い可能性もある。
- c) 人身事故も多い。発生現場は人の生活圏であり、クマが生活圏に近づいてきている傾向

がある。イノシシの出没も同傾向であるが、イノシシ罠の設置も多く、クマの錯誤捕獲も多くなっている。

【四国地区】

- a) 今のところ、特に異なる傾向は見られないが、11月いっぱいまで注視する必要がある。
- b) ブナ、ミズナラの局所的な不作が見られるため、11月のクマの動きに注意している。
- c) 有害捕獲、人身事故共はない。